

マルクス主義理論史研究の課題（Ⅵ）

——保住敏彦氏の近著によせて——

太 田 仁 樹

1

保住敏彦氏の研究活動は一貫してドイツ社会主義の歴史に向けられている。初期の論考「ドイツ社会民主党と関税問題——とくにヒルファディングの保護関税論を中心として——」（『西洋史学』LXXVIII, 1968年）は、わが国におけるこの分野の研究の嚆矢となったものであるが、その後四半世紀にわたって、氏はわが国におけるドイツ社会主義の経済理論・社会思想の研究をリードされてきた。昨年（1993年）3冊目の著作が出版され、われわれは氏のこれまでの業績のほぼ全体を一望のもとにできることになった。すなわち、①『ヒルファディングの経済理論』（粹出版社、1984年、以下『理論』と略記）および②『社会民主主義の源流』（世界書院、1992年、以下『源流』と略記）と今回の③『ドイツ社会主義の政治経済思想』（法律文化社、1993年、以下『思想』と略記）の3冊である。この3冊はいずれも、対象となる諸論者の言説を初出資料に即して紹介・検討したものであり。読者は当該時期の社会主義者たちの議論について、従来とは格段に詳しい情報を得ることができるようになった。「マルクス主義とは何であったのか」という問いが、ようやく「学問的な問い」と認められる時代となりつつある今日、保住氏の3著作から得るものは極めて大きなものがある。私の考えるマルクス主義理論史

という限られた視角からであるが、氏の業績を読むことによって触発されるものを記してみたい。

2

氏の研究においては、ドイツ社会民主党内部の経済政策とくに対外政策にかかわる論争との関連のなかで、マルクス主義経済理論がどのように発展したのか、を解明するという仕事が大きな位置を占めている。①の『理論』はヒルファディングの議論を、特に経済理論という側面に焦点をあてて検討したものである。氏自身によれば、この著作は「帝国主義現象の解明という課題はヒルファディングやレーニンの帝国主義論により解決された」という立場から書かれたものだという⁽¹⁾。本書の中核をなす第4章におけるカウツキーの扱いに、そのような特徴は顕著である。そこでの評価によれば、カウツキーの『通商政策と社会民主主義』（1910年）には、後のヒルファディングやレーニンに受け継がれる「帝国主義の段階的認識」の萌芽と、「帝国主義への自由主義的批判」の要素とが混在していたという。すなわち、「帝国主義を大金融業者と反動派の政策と見るのか、それとも産業資本自身が資本主義の新段階において帝国主義政策をとるようになったと見るのかが、決着をつけられずに、混在していたために、そうした二元的な態度が生じた」とカウツキーは批判されていたのである（『理論』191頁）。私が前回検討した相田慎一氏のカウツキー研究は、このようなカウツキー評価を覆そうとする努力であった⁽²⁾。

カウツキー評価を一面的なものにしたのは、保住氏の選び取った評価基準である。氏が帝国主義論史を整理するにあたって採用した基準は、「政策か段階か」というものであり、「帝国主義＝政策」説を未熟な説、「帝国主義＝段階」説を完成された正しい説とするものである。このような基準採用に対する異論に対しては、「レーニンが第一次大戦中、カウツキー帝国主義論を

帝国主義政策論として批判し、自らの関係を帝国主義段階論として論じて以来、社会主義や自由主義者の帝国主義観を整理する基準の一つとして、好むと好まざるにかかわらず、帝国主義を政策と捉えるか資本主義の新段階と捉えるかということが問題になると思われる」との批判を与えたうえで、ヒルファディングの議論は「帝国主義＝段階」説であると主張し、さらに第一次大戦以後に見られるヒルファディングの「帝国主義＝政策」説を『金融資本論』当時の見解と結び付けることにも反対を表明されている。また、『金融資本論』第5篇を帝国主義の経済政策論を論じたものとする見解は、同書が革命論を内包していることを見落とすものであると批判し、パルヴスやルクセンブルクほどではないが、ヒルファディングの見解が修正主義を批判する左派的なものであったことが強調されている。結論的に、帝国主義論史におけるヒルファディングの位置は、「帝国主義確立期におけるカウツキーの先駆的帝国主義研究と、帝国主義の矛盾の爆発つまり帝国主義戦争期におけるレーニンの帝国主義論とを媒介する、帝国主義の矛盾の蓄積期における左派の立場からの帝国主義論の一つであるとえよう」、と確定されている（『理論』216-220頁）。保住氏においては、「帝国主義＝段階」説と「左派の立場」は密接不可分なものであることに留意すべきである。

この著作の出版は1984年であるが、上記の諸帝国主義論の評価基準についての議論は、むしろ第4章のもとになった論文⁽³⁾の発表された当時の雰囲気伝えてある。それは1970年代のマルクス主義理論史の研究の特徴を如実に表している。レーニンへの接近度をもって検討対象の意義を測定すること、政治的な左派性と理論の正しさを結び付けること、修正主義批判の鋭さが評価の高さを保証することなどである。私はこのシリーズでこのような評価基準がマルクス主義理論史研究の前進を押しとどめてきたことを何度も明らかにしてきた⁽⁴⁾ので、ここでそれを繰り返すことは控えたい。

一言いっておきたいことは、レーニンを基準にヒルファディングやカウツキーの議論を測ることは大きな難点をはらむのだが、「帝国主義＝段階」説

と「帝国主義＝政策」説という類型分けそのものは諸学説の比較の補助概念としての有効性を持つということである。このような観点から、ヒルファディングの議論をレーニンやカウツキーのそれとを比較することは有意義であり、ヒルファディングの帝国主義認識がカウツキーとレーニンの間にあることを明確にしたことは研究史上で無意味なことではなかった。問題は、「政策」説が正解という立場では、カウツキーの議論の全体像を見失うだけでなく、ヒルファディングの議論そのものをレーニンのそれに引き付け過ぎてしまい、それについての理解も歪んでしまうことである⁽⁵⁾。

『理論』については、ほかにも多くの研究史上の貢献があり、特に最終章の「ヒルファディングの組織資本主義論」においては力のこもった論述が展開されているが、ここでは触れることができない。最近の2著作の検討に移ろう。

3

本項では出版年の順序を入れ換えて『思想』を先に取り上げる。この著作は「出版事情の困難さなどの諸々の事情により、今日（1992年10月－太田）まで発表が遅れ」（『思想』5頁）ていたものであり、実際には出版年より5年ほど以前（1987年頃）に執筆されたものであるため、研究の対象と問題の処理の仕方に連続性があると思われるからである。

内容は3篇に分かれており、それぞれドイツ社会民主党内部における通商政策論争、植民地政策論争、大衆ストライキ論争が扱われている。最初の2篇で扱われている通商政策論争と植民地政策論争については、入江節次郎・星野中編『帝国主義の古典的学説——帝国主義研究Ⅱ——』（御茶の水書房、1977年）に収録された論稿がベースになっており、その詳細な研究は当時評判となり、後進の研究者の道標となったものである。前著『理論』との関連をいえば、『理論』がヒルファディングの経済理論の論理構造を明らかにす

ることを主眼にしているのに対し、この著作は具体的な論争の展開に即したものであり、取り上げられている論者もはるかに多く、左派だけでなく修正派の議論も丹念に紹介され検討されている。とはいえ、この著作の主人公はやはりヒルファディングといわねばならない。三つの論争の最後には必ずヒルファディングが登場し、彼の議論がいわば論争の到達点という扱いを受けているのである。

第1篇では通商政策論争が扱われる。取り上げられている論者は、修正派がカルヴァーとシッペルであり、左派はカウツキーとヒルファディングである。修正派は歴史学派の影響を受けた生産力主義的な見地から工業関税を容認したが、彼らは関税制度が社会諸関係のなかでどのような客観的作用を及ぼすかを捉えられなかった、と指摘されている。

カウツキーについては、『通商政策と社会民主主義』が検討される。「通商政策が社会関係の発展におよぼす客観的な効果を明らかにすることによって、労働者階級にとっての真の利害関係を確定するという方法」が見られ、ドイツ資本主義の独占資本主義への転化を認識しはじめていたが、「そうした認識を、基本的には、ドイツ社会民主党の自由貿易主義を根拠づけるために用いたにすぎなかった」、と指摘されている。

ヒルファディングについての検討の素材は、「保護関税の機能変化——現代通商政策の諸傾向——」（1903年）である。同じ左派の通商政策論であるが、カウツキーの議論に比較すると、ヒルファディングのそれは、①新しい資本主義像の把握において全体性があること、②段階認識の成立のきざしがあること、③帝国主義政策の主体を金融資本であると明確化できたこと、④組織資本主義論の萌芽があることが指摘されて、それらがカウツキーに対するヒルファディングの優位を示しているとされている。

上記の最初の3指標に示されるような判断の底にある評価基準は、『理論』と同じくレーニンの帝国主義論、とりわけ「帝国主義＝段階」説であるといえよう。たとえば、「この段階認識の成立こそ、19世紀末の資本主義の新現象

（中間層の階層分解の停滞，恐慌の緩和，株式制度における資本所有の分散の仮象，カルテルや信用による景気変動への対応など）を根拠に，マルクス主義を社会民主党の改良活動に適合するように修正しようとする修正派にたいして，真の理論的見地を意味していた」という記述（『思想』67頁）は，「帝国主義＝段階」説を，検討対象となる帝国主義についての諸説のなかの一類型と見なすのではなく，諸説を検討する基準となる正解と見なしていることを，如実に示している。

第2篇では植民地政策論争が扱われる。取り上げられている論者は修正派も左派も多数であり論点も多様である。ここでは保住氏によるカウツキーとヒルファディングの比較に焦点を当てて見ていこう。カウツキーの議論で重視されているのは「旧植民地政策と新植民地政策」（1898年）および『社会主義と植民地政策』（1907年）である。後者を素材に，「1907年頃には，カウツキーは帝国主義を最新の資本主義発展の成果であり，新しい局面だととらえるようになった」，「カウツキーは，資本主義発展＝崩壊像という自己のシェーマの枠内で，最大限に帝国主義の認識を深めた」という指摘がなされている。さらにカウツキーには，「平和的階級」と「好戦的階級」とを区別し前者と同盟して帝国主義政策に反対するという考えと，帝国主義に対しては社会主義革命という道しかないという二つの考えが併存していて，この二つの見解が時期によって，そのいずれかが正面に出されてくるという特徴があったといわれる。保住氏によると，「第2インターの左派の帝国主義論は，後者の試みの発展として形成された」が，カウツキーがそれを成し遂げられなかったのは，「かれが理論家として徹底しておらず，折衷主義的なところがあったためであろう」ということである。ここでも，「第2インターの左派の帝国主義論」は諸説のうちの一類型ではなく，正解であり到達目標であるとされ，カウツキーの議論はそれとは別の類型と見なされるのではなく，それに到達できない未熟な議論として処理されている。また留意しておくべきことは，社会主義革命を目指すことと現存秩序のなかで帝国主義政策に反対

することとが同一人のなかで併存していることが、保住氏においては「折衷主義」として低い評価が与えられていることである。社会主義革命という道しかないと考える者が「正しい」理論家であると考えておられるのであろう。さらに、「資本主義発展＝崩壊像」という「エルフルト綱領」の論理が、「第2インター左派の帝国主義論」とは別個のものであり、むしろそれへの到達を阻む論理だと把握されていることにも留意しておくべきであろう⁽⁶⁾。

ヒルファディングについては、「ドイツ帝国主義と内政」（1907年）「シュツットガルト・インターナショナル会議」（1907年）が検討されている。そこでの議論は、カウツキーの『社会主義と植民地政策』を越えるものではなく、バウアーの『多民族問題と社会民主主義』やパルヴスの『植民地政策と崩壊』に比べても不十分なものであったとされている。保住氏はこのことから、当時のヒルファディングは金融資本の蓄積様式と資本輸出や植民政策との関連についての理論的解明に達していなかった、したがって『金融資本論』の当該部分（第4編および第5編）は1907年段階では未執筆であったと推察している。『金融資本論』成立史研究にかかわる重要な論定であるといえよう。『金融資本論』（1910年）における植民地政策論においては上記の問題についての解答が見られるが、その際に新しく「経済領域」という概念が使用されたことが注目されている。この問題についての保住氏の見解は、「ヒルファディングの帝国主義認識は、カウツキーの見解にしたがった1907年の植民地政策論から、バウアーとパルヴスの影響下に、1910年には、『経済領域拡張競争』論への転回がなされたと考えられる」（『思想』170頁）というものである。バウアーの影響はつとに指摘されているところであるが⁽⁷⁾、パルヴスの影響についての指摘は、『金融資本論』研究史における問題提起といえよう。だが、このような転回の結果としてヒルファディングが「社会主義革命という道しかない」という立場に立ったか否かについては論及がなされていない。

第3篇では大衆ストライキ論争が取り上げられる。大衆ストライキについ

ての論議はそれ以前からなされてきたが、社会民主党史のなかで重要なものは、1910年のプロイセン三級選挙法改革問題との関連での論争である。この論争は、ルクセンブルクなどの急進派がカウツキーなどと袂を分かち、「左派」が「急進左派」と「中央派」とに分岐する契機となったからである。保住氏の分析もこの論争に関するものが中心となる。論争の主役はルクセンブルクとカウツキーであった。保住氏は両者の主張を丹念に紹介されていて、このことだけでも読者は多くのもの得ることができる。論争のなかでの各論者についての保住氏の評価は通商政策論争におけるほど明示的ではないが、カウツキーについてはパンネクックによる「受動的急進主義」という特徴づけを妥当なものだとしていることと、ルクセンブルクの議論については特に特徴づけをしていないことから、氏の評価基準がルクセンブルクの立場に近いものであることがうかがわれる。

大衆ストライキ論争については、その評価の立場の違いはあれ、ルクセンブルクとカウツキーの議論の検討で充分だと思われるが、保住氏はさらにこの時期とそれに先立つ時期のヒルファディングの政治思想を検討している。この時期の議論の検討の素材は、「プロイセンにおける選挙法闘争」（1910年）である。ここでのヒルファディングの立場は、「たしかに、ローザ・ルクセンブルクのように大衆ストライの行使を主張しはしなかったけれども、街頭デモンストレーションの意義を認め、選挙法改革闘争のためにそれを行うことを主張した」、「プロイセン三級選挙法改革闘争の重要性は、ヒルファディングによっても、ローザにおけると同様に、十分に把握されていたというべきである」というものである（『思想』261-262頁）。ヒルファディングの立場はむしろルクセンブルクに近かったかのような論述であり、また「プロイセン三級選挙法改革闘争の重要性」はカウツキーにとっては把握されていなかったかのようなのである。結論的に、「1910年のマゲデブルク党大会の頃、ヒルファディングは、ベルンシュタインなどの修正派、南ドイツの改良主義者、自由労働組合指導者の経済主義などの改良主義路線とも、また、ロー

ザ・ルクセンブルクなどの急進的な革命路線とも異なる立場をとっていた。それはベーベルなどの党指導者やカウツキーなどの党中央の理論家たちと一致する、中間的な政治的立場であった」(『思想』271頁)と述べられている。この結論は妥当なものだと思われるが、先に見た262頁までの説明を読む者にとっては、ヒルファディングが分裂に際してカウツキーとともに「中央派」の立場に立ったことは、意外の感を抱かざるを得ない。カウツキーとヒルファディングの理論的差異を誇大に把握し、理論的差異と政策論上の差異を直結するという論述の無理がここに現れているのではないだろうか。

また、ヒルファディングの議論で各論争を締めくくるといふ構成も、通商政策論争では違和感がなかったが、植民地政策論争や大衆ストライキ論争については無理が目立つことも否めない。ドイツ社会民主党における政策論争を検討する際に、中心に置くべき人物はやはりカウツキーであり、ヒルファディングは軸になりえない、という印象はぬぐえない。「帝国主義＝段階」説を正解とした立場からの論争史総括という方法の難点が露呈したものといえよう。

4

本項では『源流』を取り上げる。前2著では、ドイツ社会民主党内の論争が「帝国主義＝段階」説を正解とする立場から検討されてきたといえるが、本書は趣を異にして、ベルンシュタインとその支持者の議論を中心に党内論争が検討され、その現代的意義を問うものとなっている。本書は修正主義論争を扱った第1部と社会民主主義の歴史観を検討した第2部から成っている。第1部は一部を除いてほとんどが書き下しであり、第2部は1987年と1988年に発表された論考である。ここでは主に第1部を取り上げる。その執筆時期は『思想』のそれよりもかなり新しく、しかもその時期は1989年の東欧社会主義の崩壊と1991年のソ連邦の消滅の時期であった。

第1部は4章構成である。第1章はベルンシュタイン自身の問題提起はどのようなものであったのかが紹介・検討されるが、それに先立ち修正主義論争研究の意義が奈辺にあるのかという問いが発せられ、それに対して次の3点が確認されている。すなわち、修正主義論争研究の意義は、①マルクス主義の思想や理論に関する最初の本格的な論争であったこと、②帝国主義論というマルクス主義理論の新しい領域が創造される契機となったこと、③修正主義論争は現代の改良主義的な社会民主主義政党の出現を予想させるものであったことにあるという。

ベルンシュタインの問題提起の紹介と検討は、1896年から『ディ・ノイエ・ツァイト』に発表された諸論文と1899年に刊行された『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』を素材にしておこなわれている。保住氏はベルンシュタインの主張について以下の3点を指摘している。①哲学・歴史観では、当時のドイツ社会民主党のマルクス主義解釈の硬直性を批判したものである。しかしその議論の水準は通俗的なマルクス主義批判のそれを越えるものでなく、粗雑な議論であった。②資本主義論では、結果的に、原マルクス主義の資本主義像と現実の資本主義との乖離を帝国主義論の形成によって埋めるという問題を提起した。③運動論・政治論では、党と労働組合による改良活動により漸次的に資本主義から社会主義への移行を果たすというものであり、「大衆社会状況の最初の段階において、労働者階級の改良主義的な潮流の躍進に棹さすものであった」（『源流』42頁）。

第2章では、1898年から1904年にかけての修正主義論争の経緯を反修正主義派の議論を中心に紹介・検討されている。まずパルヴスの議論が取り上げられる。彼の議論は、ルクセンブルクやカウツキーにくらべて、はるかに強く、プロレタリアートによる政治権力の奪取を強調する理論であり、社会革命の主体的な条件を重視するものであって、当時の社会民主党の指導者たちの、社会進化論的で経済決定論的な歴史観の水準をこえるものであったことが指摘されている（『源流』61頁）。つぎにルクセンブルクが取り上げられ、

この時期の彼女の議論は格調の高いものであったが、帝国主義段階での資本主義の変貌の認識や、社会主義運動における民主主義的な制度や組織の重要性の自覚という点では、第1次ロシア革命後の三級選挙法改革をめぐる大衆ストライキ論争の頃に比べて、不十分なものであった」と指摘されている（『源流』68頁）。カウツキーについては、「集中法則の貫徹による社会階級の両極分解を強調しすぎて、帝国主義段階における階級分解の鈍化と中間階層の増加という現実を見過ごすものであった」ことが指摘されている。また、カウツキーはとおい将来における社会革命を信じていたのであり、それが現在の行動を直接に規定するものとは見なかった点で、社会革命の緊急性を主張するパルヴスやルクセンブルクとは異なっていた、との指摘もなされている（『源流』77頁）。

第3章では、『ゾツィアリスティッシェ・モーナーツヘフテ』誌における、修正派の議論が紹介・検討されている。同誌における修正派の議論の本格的紹介はわが国において最初のものであり、研究史上大きな貢献である。保住氏が取り上げている人物は、ベルンシュタインのほか、パウル・キャンプマイヤー、ヴォルフガング・ハイネ、ラディスラウス・グンプロヴィッツ、コンラート・シュミット、フランツ・オッペンハイマーなどである。これらの修正派の議論の特徴は、①エルフルト綱領のなかのマルクス主義的要素に対する批判が向けられたこと、②エルフルト綱領に対するベルンシュタインの批判のなかでもとくに資本集中論と階級対立激化論に対する批判が擁護されること、③社会民主党指導部が改良活動を重視していないことを批判していることである。保住氏は「修正主義者の批判にはそれなりの現実的基盤もあった。帝国主義段階の資本主義を総体的に解明して、資本集中法則の貫徹を主張するには、かなり深い理論的準備が必要であった」（『源流』112頁）と指摘されている。

第4章では修正主義論争の論争点が論点別に整理され、修正主義論争の意義が総括的に述べられている。①労働者の状態と社会主義思想の関係について

て、マルクスや初期社会主義の思想は、19世紀の貧民の状態と意識を反映したものであったが、19世紀末以来の歴史において、労働者階級はかならずしも革命的ではなく改良主義的な存在であった。ベルンシュタインの修正主義論は労働者階級のそうした傾向に適合するように、マルクス主義を修正するものであった（『源流』148-149頁）。②ベルンシュタインとルクセンブルクとは理論と実践の亀裂を埋めようとする努力を果たした点で共通性がある。

「このいずれかの道をとることに徹しておれば、ドイツ社会民主党は世紀転換期に生じた諸問題にもっとうまく対応することができたであろう」（『源流』150頁）。③ドイツ第2帝政期の状況においては本格的な社会変革には革命という方法以外になかったのであり、修正主義派の主張する政策が実現するチャンスは少なかった（『源流』151-152頁）。しかしこの点については、別のところでは「労働者階級あるいはそれを基盤とする社会民主党だけでは、政治状況を決定することはできなかったのである。したがって、資本主義崩壊論を信じて待機主義的な態度に陥るよりは、自由主義諸政党との協力活動により、第2帝政の現実的な社会改良をめざすほうが、長期的には現実的であったといえよう」（『源流』155頁）と指摘されている。

『源流』における保住氏の立場は、『思想』までのそれとは大きな差異を見せている。従来は「第2インター左派」の帝国主義論が評価基準とされ、それに従ってカウツキーが批判の矢面に立たされていた。ベルンシュタインなどの修正派の「誤謬」は自明のこととして処理されていた。しかしここでは、「左派」が擁護・継承しようとしたマルクスの思想は、19世紀中葉の貧民の状況を反映したものであり、「労働者階級の革命性」を前提とすることの出来なくなっていた19世紀以後の時代においては、修正主義の主張は「労働者階級の改良主義的」な状況に適合する試みであったと評価されている。「左派」の理論的真理性と実践の正当性を疑うことなく自らのものとしていた氏の旧来の立場の清算である。このような清算は、研究の前進を阻害してきた評価基準の清算であるといえよう。

しかし『源流』におけるこの清算はまだまだ不十分なものであり、旧来の立場の残滓がそこそこに見られる。それは、ローザ・ルクセンブルクなどの急進左派を何とか高く評価し、同時にカウツキーに対する低い評価を維持しようという第2章や第4章における努力である。この努力は、当時のドイツの労働者の「改良主義的」傾向を認める氏の新しい立場と相容れないもののように思われる。カウツキーがマルクスの革命主体を20世紀初頭のドイツの現実のなかに見いだすことの困難性を認識していたのに対し、後の急進左派とくにルクセンブルクは「労働者階級の革命性」という幻想のなかに入りきっているからである。当時のドイツの労働者の「改良主義的」傾向を認めるならば、ルクセンブルクにおける理論と実践との統一は、彼女とその仲間の観念の内部にのみ存在するものであると言わざるをえないであろう。逆に、改良主義的労働運動とマルクスの言説とを何とかつなごうとしたカウツキーの苦悩の意味が明らかになるのではないだろうか。

ベルンシュタインとルクセンブルクが、理論と実践の亀裂を埋めようとした点で共通性があると考えられるのも、的を射たものとはいえない。ドイツの現実に定位できなかったルクセンブルクのいう実践とは、彼女の頭のなか以外にそれを見いだすとするなら、ごく一時的な実践あるいはごく少数の者の実践でしかありえないであろう。ベルンシュタインのいう実践とは全く質が違うのである。ドイツの労働者の「改良主義的」傾向を前提すれば、ルクセンブルクの道をとることに「徹する」ことは、ベルンシュタインの道をとることに「徹する」ことよりもはるかに現実性のないことであつた、といわねばならない⁽⁸⁾。この問題は③の第2帝政期における社会変革の道についての議論ともかかわってくる。保住氏はそれに関して、一方では「革命という方法以外になかった」と述べ、他方では「社会改良をめざすほうが、長期的には現実的であつたといえよう」と述べている。前者は旧来の立場の残滓であり、後者はドイツの労働者の改良主義的傾向の認知という新しい立場に適合的なものである。

『源流』は新しい立場を発見しているが、旧い立場からの諸説に対する評価も残存させている。その意味でこの著作は中間的なものというべきかもしれない。

5

『源流』が中間的なものであるというのは、保住氏がベルンシュタインの立場に自己を同一化していないからであるが、このことは実はより積極的な意味をもつもので、『源流』はより高次の立場に向うものであると言い換えた方がよいかもしいない。思えば、氏の旧説の問題点は氏が正解とみなした「帝国主義＝段階」説が大きな難点を内包するものであったことに由来したのであるが、それ以上に所与のある説を正解として他の諸説を裁断するという方法に淵源するものであった。もし本書で、保住氏が修正派の説を正解として他の諸説を裁断していたら、そのような論争史整理はソ連消滅後の雰囲気にも飲み込まれた歪んだものとなったであろう。氏がそうされなかったところに理論史研究の方法を考える上での意義があるのである。

氏は論争当事者のいずれかの側に立って論争を裁断したり所与の正解にてらして諸説を評価するという方法そのものに批判的になっておられるように見える。ベルンシュタインに対する評価について、東欧と旧ソ連におけるロシア・マルクス主義による社会主義建設の失敗が明らかになった「現在の状況は、再び、ベルンシュタインを高く評価さざるをえないものであるが、もしまた、資本主義が危機に陥ることがあれば、かれの思想に対する評価は、再び低下するだろう。その意味では、まだ、最終的な評価は下せない状況にあるといえる」（『源流』161頁）と主張されている。このような慎重な態度は、過去の思想を現代的意義という観点から読み取ろうとする性急な読者にとってはもの足りないかもしれないが、学問的に正当なものであるといえよう。

保住氏は最近別のところで、「ある社会思想の有効性は、時代により、場所により、限定されているので、それぞれの状況においてそれをあらたに評価してよいものと思う」⁽⁹⁾と、評価の時代的・場所的相対性を主張されている。この立場に徹しきるならば、理論史研究はそれぞれの状況における評価基準のもつ意味を解明することにまで進まねばならないであろう。それによってこそ「答え合わせ」的であった従来の理論史研究の歪みも真に克服しえるのであり、原資料に即した保住氏の仕事も一層輝きを増すことであろう。「活学活用主義的」な態度の完全な清算により、所与の正解を前提として諸説を採点するような方法を放棄し、諸説の内在的分析と総合・類型化による相互比較という手続きによってその道は開かれるであろう。保住氏の研究の歩みはそのことを教えているように思われる⁽¹⁰⁾。

註

- (1) 「わが国における従来の修正主義論争についての評価は、ベルンシュタインがマルクス正統派の資本主義崩壊論と19世紀末の現実との相違を明らかにすることにより、帝国主義現象の解明の必要性について問題提起し、この課題はヒルファディングやレーニンの帝国主義論により解決されたとするものである。わたし自身、拙著『ヒルファディングの経済理論』（1984年）の第4章においては、そうした評価をください。」（「著者からのコメント」、『経済学史学会年報』第31号、1993年、154頁）。
- (2) 拙稿「マルクス主義理論史研究の課題（Ⅴ）——相田慎一氏の近著によせて——」（『岡山大学経済学会雑誌』第25巻第3号、1994年）。
- (3) 「ヒルファディングの帝国主義論——『金融資本論』の背景・特徴・位置について——」（『社会科学』同志社大学人文科学研究所、第4巻第2号、1971年）。
- (4) 特に、拙稿「マルクス主義理論史研究の課題（Ⅳ）——松岡・丸山・田中氏の近著によせて——」（『岡山大学経済学会雑誌』第24巻第1号、1992年）124-125頁を参照。
- (5) 「帝国主義＝段階」説としてのレーニンの帝国主義論がどのような難点を内包するものであるのかについては、拙著『レーニンの経済学』（御茶の水書房、1989年）の「第4章」を参照。またヒルファディングの『金融資本論』とレーニンの『帝国主義論』の差異はかなり大きなものであり、その差異のゆえに『金融資本論』は、『帝国主義論』が内包していた理論的難点を一定程度ではあれ回避することができたことについては、同書の「補論2」を参照。そこでの観点から見れば、保住氏はヒルファディングの「正しさ」を強調するために、『金融資本論』を難点の多いレーニンの議論に引き付けてい

ることになり、「晶頂の引き倒し」をおこなっていることになる。

- (6) 「資本主義発展＝崩壊像」という論理が「第2インター左派の帝国主義論」とは対立するものであるという理解は、古典的帝国主義論理解にかかわる重要な問題を内包するものである。保住氏は社会の両極分解が直線的に進まないことを認識している点で、古典的帝国主義論がエルフルト綱領の論理と違うと主張されているのであろう。しかし、エルフルト綱領の「崩壊論」はそもそも『資本論』の「崩壊論」をベースにしたものであり、ヒルファディングやレーニンの帝国主義論は『資本論』の妥当性を20世紀初頭においても確認することを主要課題の一つにしていることを考えると、彼らの帝国主義論は、むしろ「資本主義発展＝崩壊」の論理の継承・補正であったと把握されるべきではないだろうか。
- (7) バウアーに関しては、彼とヒルファディングとが従兄弟同士であったという新しい指摘もなされている（『思想』148頁）。
- (8) 革命的大衆運動が存在するか否かは、20世紀初頭のドイツとロシアで状況が異なっていた。この点がドイツの急進左派の運命とロシアのボリシェヴィキのそれとの差異に結び付いている。ロシアの革命的大衆運動はマルクスが想定したプロレタリアートの革命性とは異なるものであったし、それがボリシェヴィキによって十分に代表されていたわけでのなかった。それゆえボリシェヴィキが「十月革命」について与えた説明も歪曲に満ちたものとならざるを得なかった。しかし、マルクス主義はボリシェヴィキという形でロシアを支配したのである。マルクス主義が非マルクスのな革命主体が主流である社会に浸透していくとき、その革命主体観が変容せざるを得ないことについては、拙稿「マルクス主義の展開とその歴史的意味」（平井俊彦編『社会思想史を学ぶ人のために』社会思想社、1994年、第7章）を参照。
- (9) 「著者からのコメント」、154頁。
- (10) 『源流』43頁、注(2)におけるクルト・マンデルバウムの帝国主義論争研究に関連した言及を参照。